花で『土地』を読む

作家・朴景利（パク・キョンリ）没後**15**周年に捧げる献辞
全20巻に及ぶ膨大な小説『土地』には、約600人もの人物が登場します。本資料では、それぞれの人物の性格や物語を「花」になぞらえ、その文学的な意味を読み解きます。

---

1. 花の開花時期 (花無十日紅)

物語を彩る花々は、季節の移ろいと共に人物の心情を代弁します。

- 春：オキナグサ（4月）、アンズ（4月）、ツツジ（4月）
- 夏：アジサイ（6-7月）、ノウゼンカズラ（7-9月）、ザクロ（5-7月）、ハマナス（5-7月）、ホウセンカ（7-8月）
- 秋：エゾギク（8-10月）、ムクゲ（7-10月）

---

2. 人物と花のエピソード

オキナグサ（ハルミコッ） ― カンチョン宅

「これ、咲きましたよ」「もう春ですから」
オキナグサは韓国に自生する特産植物で、深く太い根を持ちます。夫の女性問題で苦しみ、コレラで最初に命を落としたカンチョン宅。その質素でいて深い悲しみを抱えた人生が、うつむいて咲くオキナグサに重なります。

アジサイ ― ユ・インシル

「湿った日陰で咲き乱れるアジサイ、緑色に変わったその姿……」
土壌の性質によって色を変えるアジサイ。植民地という状況下で、日本人の恋人と祖国への想いの間で葛藤したインシル。しかし彼女は単に変節する者ではなく、独立のために献身する「朝鮮のジャンヌ・ダルク」として描かれています。

バショウ ― ギルサン

チェ参判の家のサランチェ（客間）の前に植えられたバショウ。広い葉を持つこの植物は、脱俗や高潔さを象徴します。物語の中でギルサンが登場する際、頻繁にバショウが描かれるのは、彼の精神的な成長と孤高な性格を象徴しているためと考えられます。

ノウゼンカズラ（凌霄花） ― チェ・チスとグチョン

「空を凌ぐ花」と呼ばれるノウゼンカズラ。吸着根で壁を登り、嵐に耐えて咲くこの花は、自由と希望、そして時に権威を象徴します。チェ参判の家の塀に咲くノウゼンカズラの下で二人が対峙する場面は、物語の緊張感を際立たせます。

ホウセンカ（鳳仙花） ― ボンスン（ギファ）

「名前と同じくホウセンカのような娘だ。」
鳳凰が羽を広げたような姿のホウセンカ。ソヒの幼馴染として育ち、後にキーセンとなったボンスンの、情熱的でいてどこか儚い運命を象徴しています。

エゾギク ― ヤンヒョン

ヤンヒョンは、亡き母（ボンスン）のためにエゾギクの花束を作り、蟾津江（ソムジンガン）に投げ入れて涙を流します。北方地域に自生するこの花は、失われたものへの思慕と、静かな悲しみを表現しています。

---

3. 終幕に寄せて

朴景利作家が最期に残した詩の一節は、私たちの心に深く響きます。
「捨ててゆくものだけが残って、本当に身軽だ」
過酷な歳月が過ぎ、老いてこれほど安らかなこと。広い庭で草木を育て、猫たちと寄り添い、ただ静寂だけが私を守ってくれた。机一つ、原稿用紙、ペン一本が私を支えてくれたあの日々。すべてを書き終え、旅立つ者の清々しさがここにあります。
